

あわゆず ふれず

第27号 2013年5月10日発行

伝えよう日本語を
広げよう徳島から



J T M と く し ま
日本語ネットワーク

「生活者としての外国人」の「働く」を見据えた日本語支援 ～ステークホルダーとの連携と既存システムとの連動～

2012年度、J T M とくしまは今後の活動の方向性を見出すに至った新たな事業に取り組みました。

ひとつは、徳島県教育委員会との協働事業「新しい公共の場づくりのためのモデル事業『帰国・外国人児童生徒サポートシステム開発モデル事業』」に取り組んだことです。本事業では、県教委、県国際交流協会、鳴門教育大学、徳島大学、J T M による連絡協議会を設置し、情報共有と方向性の一致に努めるとともに、日本語指導が必要な児童生徒への日本語講師や通訳の配置をはじめ、日本語指導者養成のための研修会の実施、学校現場が活用できるWEBサイトの開発や人材マップの作成等に取り組みました。

2012年12月には、本事業の一環として、飯泉知事との意見交換会「宝の島・徳島『わくわくトーク』」が実現しました。「わくわくトーク」では、連絡協議会のメンバーをはじめ、学校関係者、保護者、在住外国人が一堂に会し、全国的に見ても、多様なステークホルダーが緊密に連携し仕組みづくりに取り組んでいることの先駆性や、外国につながる子どもたちをとおして国際理解教育を推進し、グローバル人材育成にもつなげるといふ将来性、動き始めたサポートシステム構築の流れを止めず継続していくことの必要性などを直接知事に訴えました。

こうした取組の結果、2013年度より県の単独事業化が実現し、中長期的なスパンで子どもたちの将来を見据えたサポートシステムの構築に取り組めることになりました。子どもたちが日本語を学び、学習能力を高め、進学し、仕事を心得、地域社会の一員として貢献できる人財となることをめざして、行政、学校、日本語教育関係機関の連携はもとより、これからは企業とも連携を深め、キャリア教育の一環と位置づけられる職場体験学習の推進や、多様性を受け入れる企業風土醸成への働きかけなどを視野に入れることも必要となってくるでしょう。

さらに、私たちには、もうひとつの「働く」を見据えた日本語支援の取組が求められています。それは、まだまだ制度の隙間にある、子どもたちを育てる保護者の就労につながる日本語支援です。

2012年度、県内のロータリークラブ4団体および四国地区ロータリー財団委員会より、J T M の事務局を置く公益社団法人徳島県労働者福祉協議会(労福協)が実施する就労支援日本語講座の受講生に、日本語学習のための教材や機材が贈られました。恵まれた学習環境の中で日本語学習に取り組むことを励みに努力を重ね、240時間の日本語学習課程を修了した受講生のうち、6名が労福協の介護サービス科を受講し、ヘルパー2級の資格を取得、うち3名が介護施設に就職を果たしました。また、他の受講生も宿泊業や美容業等に就職しました。

「最初はたいへんだったけど、利用者さんが喜んでくれるので毎日が楽しいです。」就職を果たした修了生の多くがそう近況を伝えてくれます。そのことばや表情は、仕事をとおして誰かに必要とされ役に立っていることを実感できる毎日が、どれほど誇らしく充実しているかを物語っています。そして、その背中を見て育つ子どもたちもまた、人一倍、努力を重ねるのだらうと思います。

「働く」ことを見据えて「生活者としての外国人」の日本語支援を進めることは、決して平坦な道のりではありません。しかし、行政や学校、日本語教育・国際交流団体、福祉事業団体、さらには企業との連携を深めるとともに、学校教育においては国際理解教育や人権教育、キャリア教育等、また、地域社会においては、子育てや介護などのライフサポートセイフティネット、資格取得や職業紹介などのジョブサポートセイフティネット等、既存のシステムとの連動を視野に入れた日本語支援を行うことが、その道のりを地道に着実に歩む方策だと確信します。

そして、日本語を学ぶ一人ひとりの思いに耳を傾け、その思いに応えていくために、私たち日本語支援者には、日本語教育の専門性を高めるためゆめ研鑽を積み重ねることが、もっとも求められているのだと思います。

(J T M とくしま日本語ネットワーク会長 兼松 文子)

■平成24年度徳島県『帰国・外国人児童生徒サポートシステム開発モデル事業』

学校の先生のための Webサイトを作成

「徳島県 外国にルーツを持つ子どもの受け入れ手引き」

このWEBサイトの制作にあたり、「学校の先生が、初めて外国にルーツを持つ子どもを受け入れるときに、どんなサポートがあれば良いだろうか。」と考えました。今までに私達が子どもたちやその保護者を支援し学んだ「彼らが学校生活や学校との関わりで困難に思っていること」を学校の先生と共有する重要性を感じました。

例えば、子どもからは「学校の授業の言葉が分からない」、保護者からは、「学校のお便りはどれが重要なかわからない」などの声を聞いてきました。そこで、子どもが必要とする言葉には生活言語(日常会話で使う言葉)と学習言語(学校の授業で使われる言葉)とがあり、それぞれ習得に要する年数が違うため、日常生活の言葉が話せても学校の授業は理解が困難なことを分かりやすく説明しています。また、学校のお便りの主なものをやさしい日本語で作成し、自由に活用できるようにWordの資料として載せています。そのほか、すぐに使える参考サイトや参考図書も数多く掲載しました。

学校関係者以外でも日本語指導に関心のある方には、参考になることを多く掲載しています。6月中旬には、徳島県教育委員会のホームページにアップされる予定です。ぜひ、一度覗いてみてください。(玉置 房)



6月中旬、徳島県教育委員会 ホームページにアップ予定です。

- 制作
JTMとくしま日本語ネットワーク
- 制作協力
徳島県教育委員会
- Web サイトシステム制作
NPO 法人 JCI Teleworkers' Network
- イラスト
辻 真悠子さん(武蔵野美術大学)
- 協力
徳島大学国際センター 大石寧子教授
徳島大学留学生
公益社団法人 徳島県労働者福祉協議会
「就労支援日本語講座」受講生
- 参考サイト
文部科学省
「外国人児童生徒受入れの手引き」

文化庁「地域日本語教育コーディネーター研修」を受講して

12月と3月の2回にわたり、徳島県教育委員会のご推薦をいただき、福岡市にて文化庁の「地域日本語教育コーディネーター研修」を受講しました。この研修は、文化庁の委託事業をしている団体を対象に、地域の自治体の推薦状と団体の活動内容や受講希望者の活動実績をもとに受講資格者が選定され、地域での日本語教育のコーディネーター役を担う人材を育成する目的で開催されるものです。研修には全国各地の国際交流協会や日本語支援団体から代表者が全部で20名参加していました。

12月の研修Iでは、コーディネーターに必要とされる「問題把握・課題設定」「ファシリテーション」「連携」「リソースの把握・活用」「方法の開発」という5つの役割と、その役割を意識しながら、問題点を徹底的に掘り下げ、絞り込み、解決法を導き出すという方法を2日間にわたって学びました。宿題として、「5つの役割」を明確にし、問題の把握からその解決法を考え、まとめるという課題が出され、3月の研修IIでは、その課題を、丸一日かけてポスターセッションという形で発表しました。発表では、講師の先生から厳しくもこれからの活動を後押しして下さるような温かいご指導をいただき、まだまだ問題の掘り下げ方が足りなかったことを反省するとともに、今後の取組に、より意欲が湧いてきました。他団体の方とも活発な意見交換ができ、今後の活動に活かせるたくさんの気づきも得ました。

今後はこの研修で得たことをJTMの活動に活かし、地域での日本語教育のさらなる活性化につなげられるよう日々取り組んでいきたいと思っております。(辻 暁子)



発表に使用したポスター

文化庁委託 「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

2年目の取組を振り返って

平成23年度に続き2年目となった平成24年度の文化庁委託事業の取組が終わりました。平成23年度は、初めての大きい事業の受託で、外国にルーツを持つ子どもたちへの学習支援を中心に据え、ただがむしゃらに走っていたように思いますが、平成24年度は、事業の主旨を念頭に、「生活者としての外国人」のための日本語教育ということを常に意識しながら、もう少し冷静に事業全体を見つめ、取組めたような気がします。今回は「日本語教室の設置・運営」「日本語教育を行う人材の養成・研修の実施」「日本語教育のための学習教材の作成」この3本柱からなる平成24年度の取組を振り返ってみたいと思います。

日本語教室の設置・運営 ～にほんご寺子屋（子ども教室・親教室）～

子ども教室では、徳島をテーマにした教室活動や、防災センター、図書館などの施設見学を取り入れ、子どもたちに地域への興味・関心を持ってもらうとともに、子どもたちが地域になじみ、暮らしやすくなるような取組ができました。また親教室では、子育てに必要なテーマに絞って学習目標を設定し、場面がイメージしやすい教室活動を展開したことで、学習者には、子育てに必要な語彙や、まわりの人とのコミュニケーションにすぐに役立つ「使える日本語」を身につける機会になったと思います。

（詳細は前号のあわゆずぶれす26号に掲載）

日本語教育を行う人材の養成・研修の実施 ～日本語教育を行う人材の養成セミナー全2回～

「具体的な指導法」「教材の使い方」を中心とした平成23年度のセミナーとは少し趣を変え、「異文化理解」「保護者への支援と子どもの未来」という視点から、徳島大学の三隅友子先生、帝京大学の土屋千尋先生にご講演いただきました。学習者を支援するには、指導法もさることながら、学習者の置かれた環境やその背景を理解することがいかに大切かということを一度考え直す貴重な機会となりました。

（詳細は前号のあわゆずぶれす26号および今号の4P～5Pに記載）

日本語教育のための学習教材の作成 ～「子どもと暮らすためのこんにちはとくしま」作成～

平成23年度と大きく異なるのは、このオリジナルの教材が作成できたことです。23年度に初めて保護者のための教室を開設し、何もないところからその都度自分たちで作った教材の数々を見ながら「いつかこれらをまとめて、保護者のためのオリジナルテキストを作りたいね。」とスタッフ同士で話し合っていたところ、24年度には早速その機会を得ることができました。8月末に教材作成チームを立ち上げ、その後の何百通にもわたるメールのやりとりと12回の編集会議を経て、3月に無事完成しました。

親教室の学習者にモニターになってもらうことで、一貫性のある教材が提供でき、学習者の声をとり入れながら改善を加えることができるという、よい相乗効果が生まれました。

今後はまた折々に改善を加え、「こんにちはとくしま」の姉妹版となるこのテキストをさらに成長させていければと思います。

（辻 暁子）



編集会議の様子

「子どもと暮らすためのこんにちはとくしま」

～徳島で子どもを育てる人のための日本語教材～

本冊 A 4版79頁	別冊 語彙訳16頁
内容：学校を知ろう	英語
会話・練習	中国語
読む・書く	フィリピン語
生活を知ろう	
阿波弁講座	



文化庁委託 平成24年度
「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

第2回「日本語教育を行う人材の養成セミナー」
知ろう考えよう 外国人と暮らす徳島の未来

講師プロフィール

土屋 千尋 先生

- ・東京外国語大学外国語学部モンゴル語学科卒業。
 - ・東京外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修了。
 - ・1983年国立国語研究所日本語教育研修事務室事務補佐。
 - ・国際交流基金の派遣により、1984年よりブルガリア・ソフィア大学、1987年よりポーランド・ヤギェウォ大学、1989年よりモンゴル国立大学で日本語教育に携わり、「民主化」の混乱期をそれぞれの国で体験する。1992年より新潟大学勤務。1999年より愛知県立大学勤務。2007年より帝京大学勤務。愛知では、ブラジル人集住団地においてNPO法人のボランティアとして活動。また、団地内の小学校の先生方とともに、外国につながる子どもの教育支援の研究実践を行う。
- 現在は、外国人散在地域である東北・九州地方をフィールドとして、子どもの教育支援に関わるおとなの連携・協働をテーマに調査研究を展開している。

日 時●2013年1月26日(土)

午前の部 9:00~12:00

午後の部 13:00~16:00

場 所●ヒューマンわーくびあ徳島

講 師●帝京大学教育学部教育文化学科教授
土屋千尋先生

参加者●午前の部30名、午後の部25名

総参加者は30名

午前の部 講演

土屋先生のお話はモンゴルの留学生の話から始まった。日本に留学して帰国したモンゴル人が、日本式に「ありがとう」をたくさん使ったところ、祖母から、「おまえは行儀が悪くなったねえ」と言われたという話だ。モンゴルでは、物をもらっても何かしてもらっても「ありがとう」と言葉にだして表明することは少ない。「ありがとう」と言うと「まだほかに何かくれないか」とか「何かしてもらいたい」という感じを与えるからだそうだ。感謝は言葉ではなく、態度で表すということだそうだ。このことから、文化にはそれぞれの国によって違いがあるということ、そして同じ国でも、都市部と地方とでは違いがあるということをお話くださった。また、外国人の全国と徳島の国別登録者数の比較など、多くの資料を提示しながら、外国につながる子どもたちへの支援のあり方について話をしてくださった。例えば、大人は自分の意思で日本に来ているが、子どもはそうではない、子どものことを考えなければならないということである。

次に、外国につながる子どもたちを取り巻く環境の問題点として、三つの壁(制度の壁、ことばの壁、こころの壁)があげられた。特に、こころの壁を解消するには、子どもたちが自立(他の力を借りないで自分の力でやっていくこと)と自律(自分の決めた決まりに従って物事を行うこと)に向かうための「時間」と「仲間」と「大人のサポート」が必要であるということをお話くださった。

その後、外国人集住地域にある「豊田市立西保見小学校」の取組から見えたことを具体的に話してくださいました。小学校が外国人保護者にアンケートをとったところ、教員の子供以上に、保護者は日本定住を希望しており、子どもに日本で高い学歴を身につけさせたいと考えていることがわかった。アンケートからは、厳しい労働状況におかれている保護者がかける子どもへの期待や思いが読みとれた。このことから、教員の外国人児童への日本語による日本の公教育実施に迷いがなくなったということである。

最後に、外国籍であれば、保護者は日本の学校に子どもを通わ



せる義務がないので、教育を受けられない子どもや、一方、日本で生まれたけれど、家庭で両親が使う言語が違うため、言語環境が整わず、言葉のシャワーが少ない子どものことなどを考えていかなければならないと言われた。そして、保護者、学校、行政、ボランティア関係者を含む地域の人々、みんなで、協力しながら育てていければいいのではとお話であった。

午後の部 ビデオ視聴と討議

午後の部前半は、ある日系ブラジル人の中学2年生の男子生徒とその家族についてのビデオを見ることから始まった。その後、3人から4人のグループで討議をして発表した。



ビデオの内容は日本語がよくできる男子生徒が、家族、親戚、コミュニティーから頼りにされているというものであった。視聴後、先生から、引っ越したときに日本では、引っ越してきた人が隣へあいさつに行くが、ブラジルでは、隣の人が挨拶に来るとい文化の違いの紹介があった。そして、それぞれのグループでその男子生徒の立場に立って話し合った。そうすることによって、家族の中で、日本語が上手な子どもが家族と日本（学校・職場・近隣）との懸け橋のような存在となり、日本の中で生きていこうとする子どもの思いや、その周りの人々の思いを感じることができた。

午後の部、後半は、「子どもは支援者に何を望んでいるかを考えよう」ということが先生から出され、グループで討議し発表した。その内容から、相手の立場に立って考えることの重要性を改めて認識した。

そして、「おおっぴらではなく、見えないところでサポートする方が好まれる場合がある。」「構ってほしくないけど、存在を気に掛けてほしい。」「周囲の大人のさりげないサポート」「あかりを消さず、ずっと灯し続ける。」「支援者が子どもと関わるのは、彼らの人生の中の一時期に過ぎない。」「支援者自身が、仲間をつくること、仲間との連携・協力があって、それが子どもたちの手本となっていくとよいのではないか」といった言葉を、先生からいただいた。

先生は翌日「にほんご寺子屋」にお越しくださり、その日の全体学習のテーマである「県外の人に勧めるお土産は何が良いか」という学習に参加して下さった。お帰りの時間が迫る中、子どもたちにきちんと向き合い、「東京に持って帰るお土産を教えてください」と子どもたちに語りかけ、子どもたちが実際にお土産売り場に行き、いろいろ調べたそのお土産の中から「これにします」という言葉を残して下さった。まさに、子どもにも向き合い、サポートすることを私たちにを見せて下さった出来事だった。 (長町 順子)

アンケートより抜粋

- ・今まで主に言葉を教えることを考えていましたが、教える相手の環境や文化、言語を認識する事がもっと大切だということに気づいた。
- ・頭の中の整理がついた。子どもの問題だけでなく、取り巻く周囲の大人（日本の子どもも含む）の取組が課題であることが再認識できた。
- ・外国人保護者の意識や実態について詳しく教えていただけて、大変良かったです。私自身の思い込みが多々あったことを反省しました。
- ・これから支援を続けていく大きな勇気をいただきました。本当にありがとうございました。大いに楽しんで、大いに悩んで、やっていきたいと思えます。
- ・実践と知恵がマッチングしていて、すべてのお話が印象に残っています。支援者があかりを消さないでいると、子どもたちはちゃんと見ているというお話は特に印象に残りました。
- ・支援を必要としている子どもがどのような気持ちでいるのかを考え、意見を言いあうのが大変良かった。今まで深く考えたことがなかった。
- ・子どもと関わるときには、言語は子どもの一部であり、言語同様それ以外のことも大切だと思いました。
- ・日本語がなかなか上達しないのは家の中でしっかり日本語を使ってくれないからというような誤解をしていたことに気づかされた。子どもの持つ能力を信じて伸ばすサポートを心がけたいと思いました。

2012年度 JTM とくしま日本語ネットワーク定例会

+ 楽しかった

「お国自慢とポットラックパーティー」

3月24日(日)、ヒューマンワークびあ徳島で「お国自慢とポットラックパーティー」が開かれました。参加者はおよそ80人。参加者全員が自己紹介をしてパーティーは始まりました。

お国自慢は、子どもたちが歌う「手のひらを太陽に」から始まり、キーボードの演奏、インドネシア、コンゴ、フィリピン、ドイツなどの歌や踊りがあり、おいしい料理とともに大いに楽しみました。

今年で4回目のパーティーは、最後に全員で阿波踊りを踊り、盛況のうちに幕を閉じました。
(竹治 博)



パーティーの参加者に何でもざっくばらんに話してもらいました。

【インタビュアー】 加村匡子、玉置房、村松幸子、杜美智

- JTMの日本語講座を受けて、今、介護の仕事をしています。だんだん慣れてきて、楽しいです。「おまはん」とか「かんまん」とかの阿波弁が分からなかったり、施設には九州や神奈川県、神戸の出身者の人たちもいて、その人たちの話す言葉が分からなかったりして苦勞もあります。でも、やりがいがあって、これからもがんばっていこうと思います。
(フィリピン S・Eさん)
- 娘が1歳の時、日本にきました。松山に8年住みました。それから徳島に来て6年になります。徳島大学で英語を教えています。大学関係者が大事にしてくれているので助かります。娘は今年高校を受験しましたが、とても大変でした。でも、合格してよかったです。気候や食べ物など徳島の生活に慣れてきたので、オーストラリアに帰ると少し困ります。
(オーストラリア Mさん)
- 徳島に来て9年になります。ポットラックパーティーに参加するのは2度目で、今日は友だちと4人で踊りました。このモスリムダンスはフィリピンの南方のミンダナオ島の伝統的な踊りです。踊りに使った2メートルの布をマロムといって、すべりのよい裏地を縫いつけています。頭にするのはフトンといいます。今日

は楽しく踊りました。次はできればバンブーダンスを踊りたいと思っています。今はモスバーガーの店で働いていますが、コーヒーとケーキが好きなので、喫茶店のような自分の店を持つことが将来の夢です。

(フィリピン S・Aさん)

- 母国の歌で、ブンガワンソロという河の名前が、題名になっている歌を歌いました。子どものころ、習っていたので歌うことは好きです。今日は皆さんが私の歌を聴いてくれたので、とても嬉しかったです。そして、パーティーには、いろいろな国の人がいて幸せな気分でした。いろいろな国の料理も並んでいましたが、私は豚肉が食べられないので、とても残念でした。その中で、フィリピンの人が作ったビーフンがとてもおいしかったです。

(インドネシア Aさん)

- 今日はみんなの前で、初めてコンゴのダンスを踊りました。このパーティーで、いろいろな国の人と知り合えてとても良かったです。そして、フィリピンのプリンがとてもおいしかったです。(コンゴ Nさん)

- おとどしも参加しました。このパーティーは、ふだん会えない人に会えるのが最大の楽しみです。今年も長い間話していなかった友達とゆっくり話をすることができました。また、お世話になった日本語の先生とも楽しいひと時を過ごすことができました。もう一つの楽しみは、いろいろな国のお料理をいただくことです。今年インドネシアの卵がとてもおいしかったです。

(中国 Nさん)

- 日本へ来てから2年になります。今日は「ちょうちょう」「ぶんぶんぶん」をドイツ語で歌いましたが、この2曲はもともとドイツの童謡で、ドイツにいるときに日本語版の歌を初めて聴いて、日本でも歌われていることを知って驚きました。最近子どもと一緒に「大きな栗の木の下で」「むすんでひらいて」などの童謡をよく歌っています。

(ドイツ Rさん)



辻 あきお 暉夫

昨年11月、NPO法人（東京）の要請でネパールの首都カトマンズへ。

ここの語学学校で日本語を教えています。生徒は大学生、社会人合わせて21人。全員が日本の語学学校入学を切望しており、日本語ができるようになったらそのまま日本で働きたいと言っています。ネパールは産業が育っていないので、大学を卒業しても働くところがほとんどなく、多くが海外で働くことを望んでいます。

ネパールは本当に“ないない尽くしの国”です。停電と断水は毎日。停電は14時間前後、断水は6、7時間。しかもそれがいつあるかの“お知らせ”は全くありません。多くの家庭ではロウソクで停電をやりすごし、水は本当に貴重品、たら一杯の水で体をふいています。

鉄道、公共バスなし。牛肉、豚肉なし（宗教上の理由で）、海産物一切なし。白菜、ゴボウ等なく、野菜の種類が少ない。果物も同様です。

こちらの人たちは、生まれたときからそういう環境で

育っていますから、諦観の念とともにある種の割り切りでもって、たくましく生きています。しかし大変な生活を強いられていますので、表情が少し暗いように思えます。

私も当初は非常にとまどい、早く帰国したいと思っていましたが、今はもう慣れました。人間は環境に順応する力を持っているんだなと痛感しています。停電の時間はベッドで寝て、あれこれ考えごとをするようになりました。断水には水を常にバケツ一杯たくわえて対処しています。

10月に任務を終えることになっています。残された期間、ネパールの若者の夢がかんうよう全力を尽くしたいと思っています。

機会があればエベレストを見に来てください。ご案内致しますから。ぜひ。



(筆者 左から3番目)



2012年度

写真で綴る

自主事業

日本語サロン



日本語指導勉強会



教師グループ日本語研修会



委託事業

徳島県委託
夏休み子ども日本語教室



文化庁委託
にほんご寺子屋 (子ども教室)



文化庁委託
にほんご寺子屋 (親教室)



徳島県教育委員会との取組

韓国・外国人児童生徒サポートシステム
開発モデル事業連絡協議会



とくしま留学フェア



2012年
12月15日

あわ(OUR)教育発表会ポスターセッション



2012年
12月24日

地域教育支援活動奨励表彰



2012年
11月7日

飯泉知事との意見交換会
室の島・徳島「わくわくトーク」



2012年
12月11日

文科省国際教育課視察



2013年
3月6日

JTMの活動 この一年

公益社団法人 徳島県労働者福祉協議会主催



ロータリークラブより、
就労支援日本語講座受講生に教材や機材を寄贈いただきました。



他にもこんな活動をしています

- 外国人技能実習生日本語指導
- 徳島県主催「美馬市日本語教室」
担当 毎週日曜日
- 「徳島県国際交流協会日本語教室」
担当 毎週日曜日
- A L Tのための日本語講座
- プライベートレッスン
- 会報「スマイル通信」
毎月1回発行
- 機関誌「あわゆずぶれす」
年2回発行

INFORMATION

◆会員数(2013年4月30日現在) 正会員数63名 協会員数5名
 ◆入会随時受付中! 正会員…会の活動に参加し、ともに運営を行います。
 協会員・団体…会の活動を支援する個人または団体

活動紹介

ブラッシュアップのために

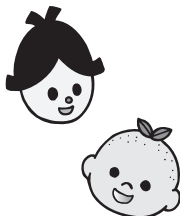
- ◇日本語指導勉強会
*毎月第2土曜日13:30~15:00
〈模擬授業と意見交換〉日本語に関心のある方ならどなたでも参加できます。
- ◇教師グループ研修会
*毎月第3金曜日または土曜日
- ◇定例会 ◇特別研修会

日本語学習をサポートする交流活動

- ◇日本語サロン
*毎週月曜日10:30~12:00
とくしま国際戦略センター

にほんご寺子屋

- *毎週日曜日13:30~15:00
とくしま国際戦略センター



就職のための日本語講座

- *5月14日(火)~7月9日(火)

介護の日本語講座

- *9月3日(火)~10月31日(木)
ヒューマンわーくびあ徳島
主催 公益社団法人徳島県労働者福祉協議会

徳島県アパレル縫製工業組合日本語集合研修

- *9月(予定)

日本語レッスン

- ◇プライベートレッスン・グループレッスン
入門から上級まで、会話や日本語試験対策などニーズにあった学習プランで教えます。
- ◇詳しくは事務局またはレッスン専用メール
jtmtokeu-lesson@mbk.nifty.com まで。

JTMとくしまのオリジナル教材紹介

Konnichiwa Tokushima

こんにちは とくしま

徳島で日本語を学ぶ人のために

本書は初級学習者向けの教材です。

日本語の基礎文型を学習します。

文型に対応した練習問題があります。

イラストがたくさんあり、わかりやすいです。

日本や徳島の暮らしに役立つ情報が得られます。

会話と語彙、表現の英語・中国語訳があり、自習学習を助けます。



●ご購入、お問い合わせは…

- JTMとくしま事務局 または
- ✿ 紀伊国屋(そごう徳島店8F)
- ✿ 宮脇書店(クレメントプラザ4F)

宝の島・徳島「わくわくトーク」の会議録が徳島県のホームページに掲載されました

平成24年12月11日に阿南市内の小学校で開催された「宝の島・徳島『わくわくトーク』~『国際理解』子どもたちの明日を考える」の会議録が、徳島県のホームページに掲載されました。

「宝の島 徳島 わくわくトーク」で検索してみてください。

また、当日の様子は、5月27日~6月23日の1カ月間、県内ケーブルテレビの「県政アンテナテレビ『とくしまハーツ』」という番組のなかでも放送される予定です。ぜひチャンネルを合わせてみてください!

あ と が き

日本の各地で立て続けに起こる地震に驚いている間にも季節は移り行き、風薫る五月となりました。

2012年度の活動をまとめた「あわゆずぶれす」27号が出来上がりました。今年度は外部との連携が更に進み、JTMの活動も広く深くなっています。ご一読くださって、ご意見・ご感想をお寄せいただければ幸いです。

(村松 幸子)

発行/JTMとくしま日本語ネットワーク

発行責任者/兼松 文子

編集責任者/山満十糸子

編集スタッフ/加村 匡子・玉置 房・辻 暁子・長町 順子
村松 幸子・杜 美智・安山 政子

印刷/徳島県教育印刷株

■JTMとくしま日本語ネットワーク

〒770-0942 徳島市昭和町3丁目35-1 わーくびあ徳島2階
 公益社団法人 徳島県労働者福祉協議会内
 TEL 088-625-8387 FAX 088-625-5113
 E-mail jtmtokeu@nifty.com
 URL http://homepage2.nifty.com/jtmtokeu/